

大塚 節子・都筑 妙子・久野 正恵

私共は最近、前回の分娩に狭骨盤のため帝王切開術を行ない、4年後の今回の分娩に際し、子宮破裂の典型的な症状、徴候を示さず、手術時に始めて発見された子宮破裂の1例を経験したので報告した。

患者は27才1回産婦、入院の4～5日前より腹壁の癍痕の疼痛を訴えていたが、腹部に筋緊張症なく、胎児部分触診、頭部は恥骨上に触れた。開腹すると、子宮は前回の古典的切開創の癍痕の全長に亘り破裂し、緊張した卵胞を認めた。健全なる胎児を娩出後、子宮は膈上部切断術を行なった。術後の経過良好で術後18日目に母児共に元気に退院した。

4. 月経困難症に対する複合ブスコパンの効果について

(産婦人科) 翠川 洋子・原 君代
重松 明子・佐藤やい子・渡部モト子

従来月経困難症に対する治療剤として種々なものが使われてきたがまだ有効確実なものはない。当教室では昭和36年より複合ブスコパンを18～45才までの月経時疼痛を主訴とする外来患者25名に原因を問わず1日6錠ないし10錠を投与し、疼痛の完全除去したもの7例、疼痛の軽減したもの13例、無効5例を、また副作用は4～5例口渇を訴えたものがあつたほか著変ないことを観察し、月経困難症の治療剤として複合ブスコパンは有効であることが判明したので報告した。

5. 巨大小腸症の1剖検例

(小児科) 鰐目 藍子・須賀 方子・内田香栄子

われわれは文献上、極めて稀な小腸の巨大なる1剖検例を経験したので、その臨床経過及び病理所見について報告した。症例は6カ月の女児で家族歴に異常なく、正常分娩で生下時体重2600gの母乳栄養児であつた。生後、少量の胎便を認め、続いて便通は1日2～3回あつたが、1カ月目頃より著明となつた便秘と腹部膨隆を主訴として当院小児科に入院した。入院時所見では栄養不良で四肢の羸瘦著しく、腹部膨隆著明、腹壁緊張高度、鼓腸著明であつた。腸管造影法で巨大結腸症十過長S字状結腸症と診断し、外科に転科させ手術を行なった。開腹所見では結腸及び盲腸は正常、回腸は末端部より約10cmは正常の太さであつたが、その上部より急激に拡張し、これが約160cmの長さ亘つていた。手術は小腸拡張部の下部より80cmの部位で空腸結腸間の吻合を行ない、それ以下の拡張部を切除し、空腸回腸断端による人工肛門を造設した。術後6日目に突然、循環不全状態

に陥り死亡した。病理解剖の結果、直接の死因は腹壁に縫合された腸管の壊死と手術時の刺激による各臓器の強い循環障害と診断された。腸管の病理所見では、回盲部には粘膜下組織の線維化とリンパ球浸潤及び筋層内の癍痕による筋の配列不平等、更に粘膜肥厚を認めた。また、小腸拡張部は拡張だけでなく、壁の肥厚、特に筋層の肥大が著明であつた。以上の所見は回盲部に以前に何らかの炎症が存在したことを意味する。そして、この古い炎症による病変部が腸管の内容物移動の際に抵抗として働き、これより上部の腸管、すなわち回腸の内容物うづ滞を惹起し、そしてこれが腸の発育過程に起つたため、この部分の腸管の強大な発達を生じたものと推定された。

6. 後水晶体線維増殖症の1例

(眼科) 矢島美佐子

4才男子の右眼にみられた後水晶体線維増殖症の1症例を経験したので、その臨床所見、及び病理組織所見を報告した。

臨床所見は、右眼視力光覚。斜照法で瞳孔の後方に白い反射がみられ、細隙灯顕微鏡で観察すると網目状になつてゐる結合組織塊が水晶体後面にせまつており、その表面に血管の新生がみられた。眼球摘出術を施行、その病理組織に後水晶体線維増殖症の典型的所見をみとめた。

本患者においては、未熟児でなく、酸素吸入の既往がないにもかかわらず、発病をみたのは、原因論的に興味があると思われる。

7. Coats 氏病の2症例について

(眼科) 大行 真理・高橋 祥子

われわれは、最近、12才男子右眼および、20才男子右眼に、それぞれ見られた典型的な Coats 氏病2症例を経験した。

第1例は、右視力0.2 (n.c.) に低下し、眼底下半に特有な変化を認め、第2例は、右視力0となり、眼底全面に同様の変化を認めた。以上2例につき、全身的検索を行なつたが、今回の検索範囲では、特に所見を認めなかつた。

8. Narkolepsie を随伴した下垂体前葉腫瘍の1例

(精神科) 広瀬 憲三・広瀬 洋子・田村 敦子

48才の主婦、24才の時子宮外妊娠の手術をうけ一方の卵巣剔除。その他に著患なく家族的にも特記すべき疾患はない。初潮18才、20才で結婚後28才迄に子供は4人出来たが31才で閉経。43才頃から夜間頻尿、この為の不眠が始まり、尿量も多くなつた。46才から急に老眼が進